

北京の難を避け福を呼ぶ民俗

(北京辟邪吉祥的民俗)

坂井美香

SAKAI Mika

神奈川大学日本常民文化研究所特別研究員
中国伝媒大学外国語学部外国人教師

はじめに

筆者は現在中国北京市内に在住している。北京市内の発展はめざましく、あっという間に古い建物が壊され、あっという間に新しいものが造られている。住居も同じことで、フートン（胡同）と呼ばれる市中心部の昔ながらの住居は観光用に建て替えられたものが多く、同様に平房（pingfang）と呼ばれる平屋の建物もどんどん少なくなっている。その変容は日本の高度成長期を凌ぐ勢いであり、住む人がいなくなったなど見ていると、そのうちに取り壊し工事が始まり、しばらく置いた後に工事が始まり、あっという間に高層のマンション群やショッピングモールが建てられ、街が変わっていく。

しかしながら、そのような街の変容に関心を持ち、研究する事例や事例報告は少ないようである。その理由を考えるに、中国人研究者の関心は、いかに衛生的で、見た目の良い住宅や街に作り替えるかにあることが多いし、民俗事象を扱った論文でも1つの信仰について総合的にまとめた研究が多い。また、調査手法として、個別事例を積み重ねる非効率的方法が行われにくいこともある。また、政府が風水や民俗宗教的行為に対し否定的見解を持っていることが、個別事例を調査しにくくしていることも否めないだろう。

以上のような理由で、変容する民俗の現在の状況を記録に留めておきたいと考えた。1つ1つの事例を地道に積み重ねていくことで、住宅形態変化、規制の中でも行われて続けている民俗的行為、行為の伝承を支える意識、それらに係わる変化が明らかになるのではないか。本稿において、変容する北京を中心とする今

の招福、除災について瓢箪、鏡を中心に見たり聞いたりした事例を報告、検討したい。

なお、本文中の中国語表記にあたり、人名、地域名、参考文献名、その他固有名称については簡体字表記をそのまま用いた。日本語漢字で表記が可能なものは漢字で、漢字表記がしにくいものについてはピンインで括弧書きをした。

1 民俗行為は迷信か民俗か

中国ではユネスコ加入以来、国家を代表する伝統文化は大事にされ、保護されている⁽¹⁾。しかしその一方で、風水や各種の招福、除災行為となると、公的にはその存在は否定的に扱われてきた⁽²⁾。ゆえにニュースや新聞では、時々、公的な建物を風水に依拠して建てたと批判記事が掲載されていたりもする⁽³⁾。近年、民俗行事保護の風潮は高まっているようであるが、しかし、2017年現在でも、共産党新聞などを通じ、信じないように呼びかけられている。例えば、「严格落实“十二个不准” 严明党的政治纪律」（厳格に「12の許さない」を執行しよう 厳正な党の政治規律）〔2017年2月3日付〕と題される文書⁽⁴⁾の中では、「古臭い迷信を許さない、信仰宗教を許さない、邪教への参加は許さない」と呼びかけている。

そのような状況下で、当然のごとく、民俗行為が迷信かどうか、風水が迷信かどうか、民俗と社会秩序の関係はどうあるべきかなどが論じられてきている⁽⁵⁾。そうではあるが、ごく普通の生活の中で、風水や各種の招福、除災行為は人々の生活の中で信じられ、実際に行われている。つまり、古い平房が新しくなっても、

平屋の建物が高層マンションに替わっても、福を招き、災いを避けたい気持ちはあるということだ。

2 鏡

2-1 ドアの上や、窓の上に鏡を置く

まずは、所々で見た鏡について考察してみたい。図1は友人の部屋に飾られた八卦鏡と中国結⁽⁶⁾と中国結⁽⁷⁾である。鏡も中国結も難を避け、吉祥を求めるための装置であ



図1 窓の外側に向け置かれた八卦鏡。その裏に中国結が飾られている。



図2 窓の外に向け置かれた面。山、川が描かれている。

る。鏡は外に向けて掛けられ、室内側に向かって結(jie)が掛けられている。室内には机と椅子が窓に背を向けて座るように設置されている。八卦鏡が掛けられている場所は椅子の背後上部である。つまり、座る位置の背中側にある窓の上部に掛けられている。図2の鏡は、「山海鎮」というもので、金属板(鏡)に山水・八卦・霊符・日月・鎮宅・明光・財神などと書かれ、八卦鏡が埋め込まれている。

次は、窓の中から外に向けられたものではなく、窓の外、ドアの外に置かれた鏡である。図3、図4共に、建物の外側に道路に向けて置かれている。どちらも恭王府に近い東煤廠胡同⁽⁸⁾に設置されていたものである。図3は入り口の上に鏡が設置してあり、図4は鏡と瓢箪が設置してある。共にT字形になった道路

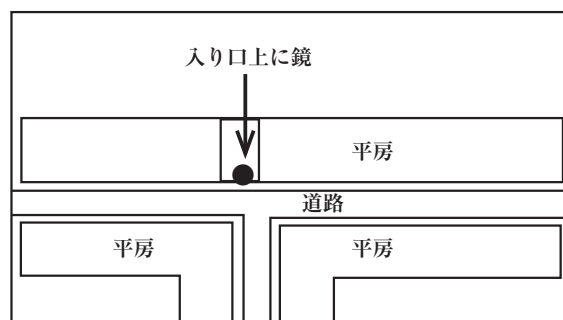


図3 北京市西城区東煤廠胡同にて。入り口の上に鏡が掛けてある。



図4 北京市西城区東煤廠胡同にて。鏡と瓢箪。

の、道が建物にぶつかる場所に設置してある。また、直径1メートルほどの円形ミラーガラスが入り口横に設置してある家を見たことがあるが、これもカギ形になっている道路の、道が建物にぶつかる位置に設置してあった。図4では、鏡の隣に瓢箪がぶら下げられている。瓢箪が単独で吊り下げられている場合もあるが、他の物と共に吊り下げられている場合も多い。

図5は「謝絶参観」とあった家の入り口である。門の奥の方に鏡が立てられ、その上に、トウモロコシ、瓢箪、唐辛子、にんにくが掛けられている。南鑼鼓巷という若者や観光客が多い地区で見たものである。観光客が宅地内に入り込むためか、「謝絶参観」（見学お断り）、「観光客止步」（観光客入るな）と書かれた紙や板を置く家が多い。入り口に鏡を置く家には、必ずと言っていいほど「入るな」と書かれたものが貼ってある。観光客が迷惑な存在だということだ。



2-2 窓際に小さい鏡を置く

次に窓の内側に小さな鏡を置く事例を考えてみたい。住居が高層化し、同じ形の建物が規則正しく建てられると、互いの窓と窓が相対することが多くある。そんな時には相手にわからないように小さな鏡を窓に置くという。相手からの影響を避けるためである。ただし、窓同士の距離があまりに近過ぎると相手の窓から見え、「鬼ではないよ、はずしてくれ」と言われることがある。だから、そんなことを想定し、こっそりと見えない場所に鏡を置くのだという。（54歳女性）

以上のような話を聞き、どのような鏡をどのように置くか、実際に見てみたいと思っていたところ、北京市からほど近い張家口市南城で見せてもらうことができた。この家では、北側に2個、南側に2個、直径8センチほどの鏡を置いている。図6のごとくである。家と建物の関係は、下図のようになっている。もともと平房が建ち並んでいた場所に、平房を取り壊して、2015年に建てられたマンションである。そのため、旧来の道がそのまま残り、建物が道路を遮り、道路が居室に向かって来る形になってしまっている。その向かって来る道路に対して、小さな緑の鏡を外に向けて置いている。また、この家では、南側の窓に瓢箪を2つ飾っている。



図5 北京市東城区蓑衣胡同にて。入り口の奥に鏡が設置され、その上に、トウモロコシ、瓢箪、唐辛子、にんにくが掛けられている。

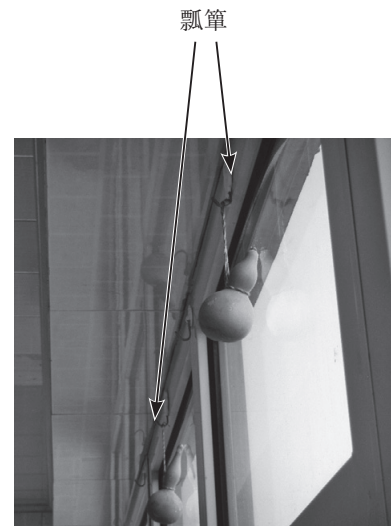
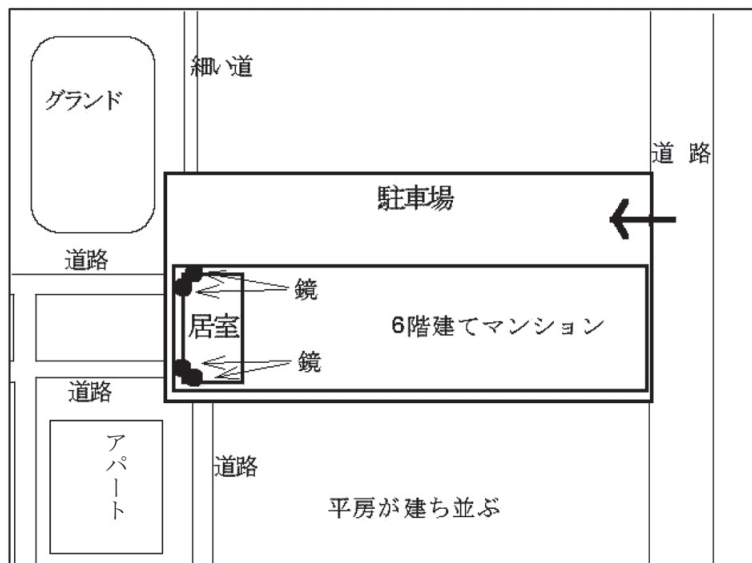
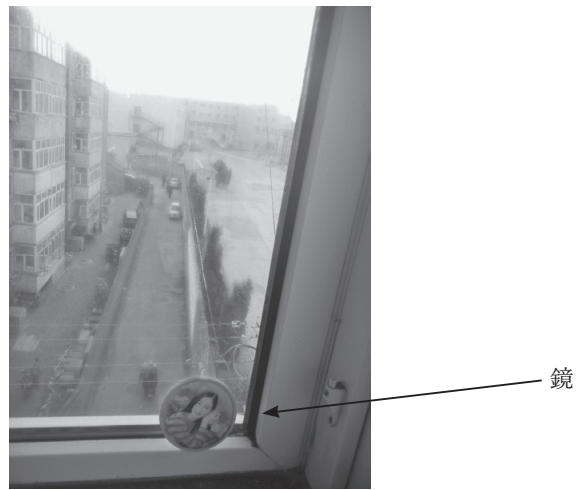
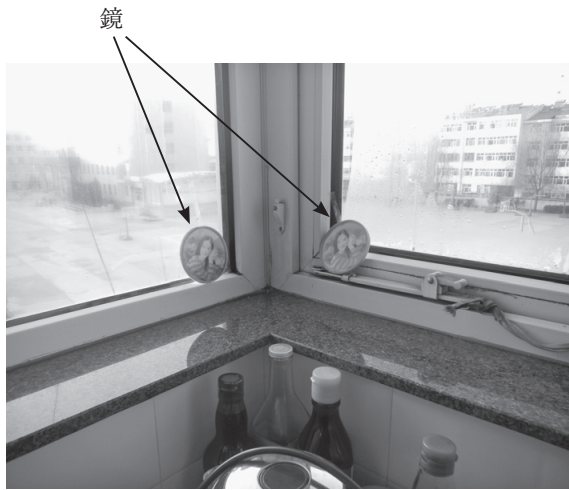


図6 張家口市南城にて。窓の外に向けて置かれた小さな緑の鏡、2枚。左側が北側に置かれたもの。右側が南側西向きに置かれたもの。下右写真は南の窓に掛けられた瓢箪2個。下図は建物配置図。

なぜ、鏡を置くのかと尋ねたところ、引っ越しをして来た当初は鏡を置いていなかった、しかし、2016年の夏頃から、この家の主婦の体調がすぐれなくなり、道路がこの家に向かって突き刺さるようになっていたので、そのせいかと思い、鏡を置いたのだという。瓢箪は、災いが来ないように、良いことが来るようにと窓際に飾っているのだと教えてくれた。(54歳男性、52歳女性) 体調が悪くなるなどの家中の好くないことに対し、その対策として鏡が置かれた事例である。

2-3 なぜ、鏡を置くのか

「山海鎮」の八卦鏡を部屋に飾る友人に、どうして図1のようなものを飾るのか聞いてみた。すると、

「山海鎮」は、「煞 (sha 疫病神、不吉な神の意)」を防ぐために、友人 (54歳女性) が買って掛けてくれたのだそうだ。「煞」は「杀 (sha 殺の意)」に通じるものである。その友人は、部屋の外側に窓を覆う大きな木があるのを見て、そこから悪い気 (煞) が入ると風水では言われるため、身体が悪くならないように、家族が平和であるように、仕事が順調であるように願って掛けたという。掛けて貰った本人 (54歳女性) は、背中側にそういう物があることで、「山」があり「頼り」になるとのことだ。また、その友人に、なぜ八卦鏡を信じるようになったのかと問うと、以前家の中で怪しい物音がすることがあり、勧められて「山海鎮」を飾ったら音が止まったからだという。買った本人は災いを鎮めるために飾り、その後買い求め

た「山海鎮」は、災難があったから災難除けをするのではなく、災難を除け、安心するための装置として飾られたということになる。

次に、入り口や窓の外側に飾られる鏡について、その役割を知ることにはしたい。なぜ鏡を入り口や窓に飾るのかと質問をすると、悪いことを反射するためという答えが返ってくる。鏡が光を反射することから、「邪」(xie 鬼神がもたらす災厄)を反射し撥ね返すと考えられている。

建物の中に光が入り過ぎるのも良くなく、反対側の建物の角が見えるのも良くなく、そのために「山海鎮」や「八卦鏡」を使うのだという。また、T字路などで道が建物にぶつかって来たり、建物の左右に道路があり建物が道を遮断しているような場合もよくないという。それは、心臓を刺すようで良くないからだそうだ。また、病院の近くなどもよくないという。(54歳女性) また、別の女性(48歳)は、病院や煙突に向いて家が建っているのはよくないといい、そのような場合には鏡をドアの上に置くのだそうだ。

さて前述したように、北京市内では多くの人が集合住宅に住むようになったために、平房に住んでいたときは異なる事例が生じている。住居区の中に多くの集合住宅がある場合、互いの窓が向かい合ってしまうことがある。互いに影響し合うため、「鬼」を含めて悪いものを退治するため、窓の外や内に鏡を置く家がある。

⁽⁹⁾ 郑晓江『中国辟邪文化大观』によれば、T字路やY字路、水が流れる所に家を建てるのは避けるべきであり、また、西に向かって広がる家、東西に長く南北が短い土地は避けるべきだという。そのような家には、鎌刀(かま)、尺子(物差し)、鏡、秤杆(竿秤の竿)等を米篩の上や壁の上に掛けると良いとする。鬼は尺子を恐れ、鎌刀は魔鬼(魔物、邪悪なもの)に畏れを生じさせ、鏡は「照妖鏡」(妖怪などの正体を照らし出す鏡)で、秤杆は鬼と人を区別するという。また、民間では種々の人工的に作られたものは厄払いや避邪(災禍を避ける)の効能があると信じられ、銅鏡は家の中に置けば、邪や祟りを「反射」するのだという。他に爆竹、銅鑼、字画(書画)、紙符、塔、偶像、金属製品などは直接的に鬼神の訪れを避け、災禍から

免れるのに用いられるのだとする。

つまり鏡は壁に掛けたり、窓や入り口の上に置けば、鬼の正体を映し出し、反射することで鬼の来訪や災いを封じ、厄払いや辟邪の効能があるということだ。道路が建物によって遮断される場合、T字路やカギ形になっている場合、いずれも進む道が直線的ではないことで、その道路から道を遮断した建物の中に悪いものや、病気の原因が持ち込まれて来ると考えている。つまり、道路を伝って悪いもの(邪気)が家の中に入って来るとことになる。ゆえに、悪いものが家に入り込まないように鏡を置いて反射させる。また、鏡を窓が相対する場所に置くということは、相手の家から窓を通して自分の家に悪いものが入って来るということであり、また、相手の家の人間ないしは悪いものが自分の家に影響を及ぼすということだろう。逆に考えれば、自分の家に向けて鏡が設置されるということは、自分が避けるべきもの、つまり鬼だと認識されているということになる。すなわち、窓の問題で人間関係に影響が及ぶことになるが、それはそれで好くないことで、それを避けるために小さな鏡がこっそりと置かれるということだ。

気の流れを障害する構造が悪いとし、窓が相対していることも好ましくないことと同時に、病院や煙突などの健康を害するイメージのあるものは避けられる。そのような環境下では、鏡は悪いもの(邪気)が家の中に入り込まないようにする装置として用いられる。

3 瓢箪

3-1 瓢箪を吊す、飾る

瓢箪はあちこちでよく見かける。売られている場合も、吊されている場合もある。また、友人の家に遊びに行くと必ずと言っていいほど飾ったり、吊してあったりする。ポピュラーな存在である。面白いことに、作り物ではない天然の瓢箪はそれほど大事にはされていない。埃をかぶっていることも多い。

図7の家では、窓枠の左右に1つずつ大ぶりの瓢箪が結ばれていた。瓢箪の間には鳥かごが吊されているのだが、この鳥かごと瓢箪という取り合わせはなぜか

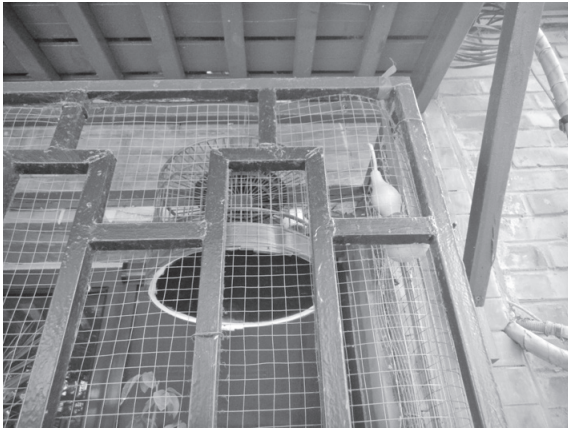


図7 北京市北鑼鼓巷にて。窓の両側に1つずつ瓢箪が吊してある。写真は右側のみ。



図8 北京市東城にて。洋服掛けに吊された瓢箪。

よくある。

図8は家の中である。服を掛ける棒にぶら下げてある。会社の前の空き地で瓢箪を毎年自分で作り、新しいものができると取り替えるのだという。(58歳男性)

瓢箪は、あちこちの観光地や土産物店、露天で売られている。また、秋には大量の瓢箪を磨く人を見かける。そのまま「天然葫芦」(自然のままの瓢箪)として売られるもの、装飾用に加工されたものなど多様である。このように、あちこちどこにでも売っているということは、それだけ売れる商品なのか、手に入りやすい材料かどうかだと思われるが、さほど売れている様子はない。図9は北京郊外の「灵慧山」(靈慧山 linghuishan) という観光地で、その回廊にある土



図9 灵慧山の回廊に飾られた瓢箪の宣伝と土産物の瓢箪。上の写真には、瓢箪の効用が書いてある。下の写真は、門前の土産物露店で売られていた掛け物とキーホルダー。



図10 南鑼鼓巷 北京老物件博物館にて。非物質文化遺産の紹介を兼ねた「毛猴」の制作販売店で瓢箪が売られている。

産物を宣伝する案内画と、売られていた瓢箪である。案内画には、瓢箪の発音が福禄と同じであること、祈福納祥、辟邪鎮宅、招财進宝の品物であると効用が書かれている⁽¹⁰⁾。

図10は、北京市内南鑼鼓巷にある北京老物件博物



図11 朝陽区定福庄西街にて。架台の上には鮮やかなビニール製、紙製の瓢箪、下には手首に着ける紐が掛けられている。

(11)
館内の「毛猴」の制作販売店で売られている「天然葫芦」である。大小様々な未加工の瓢箪が売られている。また、その隣の店には非物質文化遺産として天然瓢箪に彫り物を施した「京烙葫芦」が売られている。

3-2 端午節、紙の瓢箪

2017年の旧暦の端午節は5月30日だった。屋台街の一角にこの日1日限りの紙の瓢箪売り(図11)があった。人々が買い求めているのは、カラフルな紐である。紐を買い、手首に結んで貰っている。この紐は、その日1日身に着けておけばいいと言われた。2、3日着けていてもいいという人もいた。手首に着けることで病気になるのだという。

そして、カラフルな紐と共に売られていたのは、紙の瓢箪だった。紙製の瓢箪を掛けることを「挂紙葫芦」(gua zhi hulu)といい、瓢箪を四半分に縦割りした形で売っていて、それを広げると瓢箪になる。大小様々、透明ビニール製のものと紙製のものと両方を

売っている。屋台のおじさんが言うには、紙製のものは昔のもので、最近のものは透明のビニール製である。鮮やかな紙の瓢箪を家に飾ることでの家族に幸せと平安、1年間病気に罹らないように願うものだそう。

3-3 なぜ、瓢箪を飾るのか

中国では、瓢箪の言い方が2つある。1つは「瓢」(piao)で、もう1つは「葫芦」(hulu)である。「瓢」は黄色くなって乾いたもの、または、瓢箪を半分に割った柄杓のことをいう。「葫芦」は青い蔓のあるものを指す。

まずは瓢箪を飾る効用について聞いたことを紹介していこう。瓢箪が窓や入り口の上に飾られている写真を見せると、「それは政治的には引退して関わりを持ちませんよ」(「掛瓢代表隠居政治的隠居」)の意味だと即答する。(53歳男性、40歳女性)重ねて聞くと、「箕山挂瓢」という語があり、その解釈は「用为隠居不仕之典」(隠居をしたために公の祭典には出席しない)ということだという。

ついで、即答される瓢箪を飾る理由は、葫芦(hulu)と福祿(fulu)は発音が似ていて、福が来ることを願い、難を避ける意味があるというものだ。(40歳女性、48歳女性、その他)それに関連して、瓢箪を掛けておけば、仕事が上手くいき、家に福がもたらされるのだともいう。(57歳男性)

加えて瓢箪が蔓性であり、その蔓が長く伸びることから、「瓜の蔓が長く伸び続けるように家族がどんどん増え、家族の生業も盛んになる」ということも瓢箪を飾る理由だ。これは、前出の57歳男性の談であるが、この人は瓢箪を自分で作り、自分で飾ったり、友達に分けたりしている。

また、瓢箪にまつわる昔話が各種あるが、そこから「昔神様が瓢箪を使って妖怪を捕まえた。瓢箪の形は首の部分が細くお腹の部分が太いので、妖怪を一旦入れるとなかなか出られない」から瓢箪を掛けておくのだともいう。(60歳女性、遼寧省)

任昉『中国民間禁忌』によれば、「瓢箪は神仙が使うものだ」という民間の迷信があり、瓢箪を入りに掛けていたり、瓢箪の中から霊気があふれ出ている様子を描

いた絵を部屋の上に飾る。そうすれば、妖怪は降伏し、追ひ払われる⁽¹²⁾」ということだ。

大乔『图说中国吉祥物』では、以下のように瓢箪の効用が説明される。

人々の観念中では、葫芦は、王禎⁽¹³⁾が言うように「累然而生、食之无窮（繩であるが生きている、食べ方に限りが無い）」というものである。葫芦の中には種がたくさんあって、その数が数え切れないことから、後代まで存続するもの、子孫が多いことを最も良く象徴するものとして作り続けられてきた。同時に、葫芦の蔓が生い茂って、延々と長く伸びることから、人々は、その広くはびこり、長く続くという意味を取って、吉祥を象徴するものとしてきた。この他、葫芦の「蔓(wan)」の発音が「子孫万代」と「千秋万代」の「万(wan)」の発音に繋がることから、その意を万代に渡って続くことを寓意として持っている。「子孫万代」と呼ばれる葫芦の蔓の上にはいくつかの葫芦がある紋様図がある。それは葫芦の種子が大変多くできること、その蔓が延々と長いこと、「蔓」と「万」の発音が同じことから来ている。このような紋様図案は、画題、家具、什器、布地、建築、彫刻によく使われ、中国人の根強く大きな願望を表現し伝えている⁽¹⁴⁾。

つまり、瓢箪を飾ったり掛けたりするには3つの意味があり、第1に葫芦の中には種がたくさんあることから末代までの子孫繁栄を象徴し、第2に葫芦の蔓が長く生い茂ることから長く繁栄するものとして吉祥の意味を持ち、第3に葫芦の「蔓(wan)」の発音が「子孫万代」と「千秋万代」の「万(wan)」の発音に繋がることから、万代に渡って続くことを意味するということだ。

以上をまとめれば、瓢箪の吉祥としての性質は、葫芦(hulu)と福祿(fulu)の音、蔓(wan)と万(wan)の音のように言葉の音を掛けて吉祥や子孫繁栄を願い、瓢箪の旺盛な成長力や長い蔓から子々孫々の繁栄を願い、その種の数の多さからも子孫繁栄を願うことから生じているということになる。その一方で、瓢箪

には、引退や隠居を示す意味があり、入り口の上や窓外など外に向けて瓢箪を掛けることで政治的に係わらないという意志を示すことができる。また、瓢箪の中空な形状から妖怪を吸い込むもので、または神仙が使う道具として、「鬼」を追ひ払ってくれる装置にもなる。

3-4 瓢箪に係わる民俗行事

以上のように、瓢箪にはいろいろな効用がある。家に飾られるのは天然の瓢箪のみではない。玉(yu、ぎょく)で作られたものも、紙で作られたものもある。そして、「3-2 端午節、紙の瓢箪」の項で紹介したように、天然瓢箪ではない瓢箪が季節の行事に飾られることがある。瓢箪のことを聞いているうちに、瓢箪といえど話してくれた民俗行事がある。紹介しておきたい。

まず、河北省保定市安新県では、立春になると母親が赤い瓢箪を洋服に縫い付けてくれるのだという。主に右肩で、立春が終わると取ってしまう。「葫芦正不生病、葫芦歪不生灾。(瓢箪がまっ直ぐならば病気にはならない、瓢箪が歪んでいるならば災いは来ない)」という意味がある。また、立春には赤い紙を切り抜いた瓢箪を家の窓に貼る。こちらは、新しい年の福祿を願うものだという。(23歳女性)

吉林省長春市では端午の節句に「挂紙葫芦」を窓に飾るといふ。紙製の立体的な瓢箪で、剪紙ではない。端午節が過ぎて初めて雨が降ったら、捨てる。悪いものが雨と一緒に流れていくのだという。(19歳女性)

瓢箪には、子々孫々の繁栄を願い、悪いものを吸い込むという他に、水で災いを流すという寓意があるようだ。更に事例を集め、検討課題としたい。

4 門の周辺、門神、「泰山石敢当」

4-1 門の周辺、門神

中国の家庭にはもれなくといってもいいほど、その門やドアに招福、吉祥を願う画が描かれていたり、図像や字画が貼られている。石の彫りものが置かれていることも多い。その題材も、文言も、意匠も、大きさも様々であり、好みに依るところが大きいらしい。

建物に関する避邪について聞いてみると、鎮宅のた



(拡大図)

図12 「門神」南锣鼓巷東綿花胡同にて。入り口の左側下に埋め込まれている。



図13 南锣鼓巷板廠胡同にて。門神図象と符咒。

めの装置は見えるところだけではなく、見えないところに置く場合もあるという。しかしながら見えないものは確認することができないため、外側から見えるものについて考える。

前述のように、家々の門にはその大小を問わず何らかの吉祥図や避邪のための装置がある。獅子や麒麟の石像、門簪 (menzan、門扉の上部に突き出ている丸

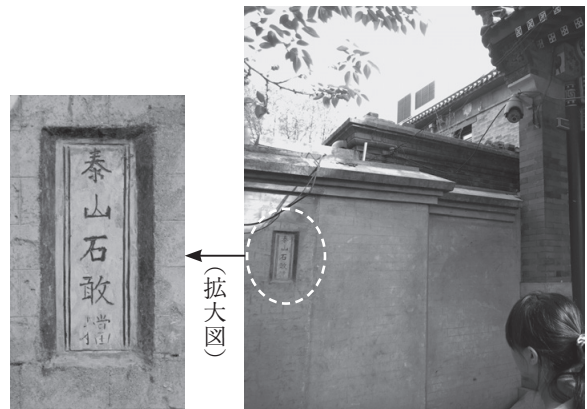
い木)、門碓 (mendun、門枕石とも称される)、「福」の文字や門神、鍾馗、老虎 (laohu、虎) の図象、各種符咒 (図12、図13) などが貼られているのは定番である。

図12は入り口の左側下に埋め込まれている門神である。この神が何ものであるかは確認できていないが、このように埋め込まれた石彫りの像はあまり見かけない。

任聘は、動物の図象は災難から免れ、農作物が被害に遭わないようにし、幸運を呼び込むとし、各種符咒は、種々の禳解 (rangjie、厄払い) 方法であり、凶⁽¹⁵⁾悪な邪気を駆逐してくれると説明する。

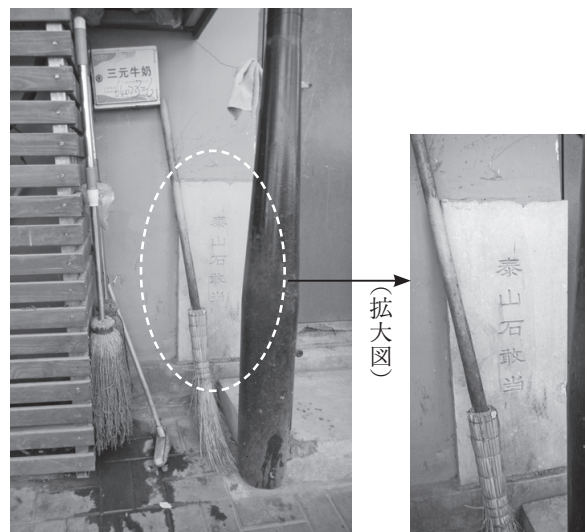
4-2 「泰山石敢当」

図14、図15は「泰山石敢当」である。再び任聘『中国民間禁忌』によれば、もともとは「石敢当」の三字



(拡大図)

図14 「泰山石敢当」后海西沿東明胡同にて。カギ形の路地の突き当たりにある。



(拡大図)

図15 「泰山石敢当」南锣鼓巷東綿花胡同にて。ドアの横に設置されている。

だけであったものだが、後代に「泰山」の文字が付いて「泰山石敢当」の五字になったものだとする。「石敢当」は百鬼を鎮め、災難を嫌い、役人には幸せをもたらし、庶民には安らぎをもたらす。このような石を用いて鎮宅驅邪を行うことは、古代靈物崇拜の遺風である⁽¹⁶⁾。また、大喬は『図説中国吉祥物』において、人家の入り口や街頭、路地の入り口、道の入り口などに設置されるもので、その意は邪(xie、鬼神がもたらす災厄)や祟りを避け、不吉なことを鎮圧し、防御的性格を持つものだとしている。人々はこれらの意味を更に広げ、病気治癒の効果があるとする地方もある⁽¹⁷⁾という。

ところで、「泰山石敢当」「石敢当」は日本各地にも散見する⁽¹⁸⁾。小玉正任によれば、「石敢当」は14世紀に中国福建省から沖縄(琉球)に伝わり、全国29都道府県に存在し、中でも沖縄、南九州に濃密に存在するという。ただし、「石敢当」と刻むものが主流であり、古い石敢当に「泰山石敢当」が多いと述べている⁽¹⁹⁾。

中国国内では、「全国石敢当の分布状況から見ると、東南地区を中心とし、福建省、台湾、山東省などに集中する⁽²⁰⁾」ものであり、北京においてはあちこちに見かけるものではない。また、「石敢当」とのみ刻まれているものではなく、「泰山石敢当」となっている。招福除災文化とその伝播を論じる上で興味深い。

図14は比較的高い場所、カギ形の道が塀に突き当たる場所に設置されている。填められている位置が高いことに加え「泰山石敢当」と刻まれていることにも注意したい。図15の「泰山石敢当」は比較的新しい物ではないかと思われる。後から填め込まれたものようだが、特に道路が突き当たるような場所ではない。興味深いことに、改装中の胡同を歩いていると真新しい「泰山石敢当」があったり、郊外の建材街の店に「泰山石敢当」と彫られた石を見ることがある。このことが、「泰山石敢当」の利益供与が北京の人々に知られてきたことを示すのか、人の移動、都市流入に伴って持ち込まれているのかは不明である。

おわりに

筆者が北京の街中で瓢箪に興味を持ったのは、日本でつるもの禁忌の研究をしていたからである⁽²¹⁾。当初は、禁忌対象どころかあちこちに瓢箪が売られ、飾られ、吊り下げられていることに興味を持ち、見つけるたびに写真を撮っていた。その写真を周囲の中国人の知人に見せ、どういう意味だと問うと、「良くないものを避けるため」、「福祿と同じ発音だから」等という返事が返ってくる。瓢箪を作らない禁忌を聞いたことがあるかと問うと、「えっ、なぜ?」と不審な表情をされる。

日本では、つるもの、つまり、瓢箪、夕顔や南瓜を作らないことで難を避けていた⁽²²⁾。難を避けるという目的は一致するのだが、積極的に飾るか、意図的に作らないかの差は大きい。もう少し調査研究を進めていきたいと考えている。

最後に、付け足しのようなではあるが、「はじめに」において、「見たり聞いたりした情報を報告する」とした理由について述べておきたい。1つには、日本国内では自分で直接に聞き書き調査するのが当たり前であるが、地方はもちろん北京市内でも個人で調査するのがそう簡単ではないからだ。呼び鈴を押して家の人に詳しく聞いてみたいと思うことは多々あるが、大学の研究プロジェクトとは違い、見ず知らずの外国人が話を聞けることは少ない。

もう1つ理由がある。「○○について教えて欲しい」「○○のことが知りたい」と言うと、もれなく携帯電話を取り出し、インターネットで情報を調べ始め、その情報を教えてくれるからだ。あなたの家でやっていること、お父さんお母さんから伝えられたことが知りたいという意図を理解して貰うのに非常に時間がかかる。それは若い世代だけではなく、40~50歳代の人々にも共通する。その理由を考えると、地方から都市への労働力流入や大学進学、12~3歳から始まる寮生活などのために親や祖父母と一緒に暮らす期間が短いことが影響し、民俗知識の伝承が断ち切られているためではないかと思われる。ゆえに、見たり聞いたりしたことなのである。

私が訪問させて貰ったそれぞれの家や部屋では、大

(23)
なり小なり瓢箪を飾り、剪紙、年画、吉祥図を飾っていた。それはすなわち、それらの道具に関する情報の来源が、家族であろうとインターネットであろうと、自分の所に災難や面倒な事案が来ないように、福が来るようにという願う行為そのものは受け継がれているということだ。

付記

この研究ノートの執筆に当たっては、中国伝媒大学外国語学部大学院生の蘇超さんと郭梓輝さんに調査の手伝いをしていただいた。お礼を申し上げる。

注

- (1) 中国は1985年にユネスコの『保護世界文化与自然遺産公約』（世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約）に加入し、2004年8月に、十届全国人大常委会第11次会議にて、『保護非物质文化遗产公約』（無形文化遺産の保護に関する条約）について批准、加入を決定している。
- (2) 中国民間信仰が受けてきた受難と復興については、李俊頌「“迷信”、还是民俗：如何看待中国民间的信仰礼俗」（迷信か民俗か、いかに中国の民間信仰儀礼を扱うか）〔腾讯文化『文化纵横』杂志 2017年5月24日付、<http://culqq.com/a/20170524/023797.htm>〕、白松強 2014年「祠堂から村廟まで：中国の農村地域からみた民間信仰の復興——河北省武安市固義村における李氏祠堂を事例として——」『21世紀東アジア社会学』第6号 日中社会学会、などが参考になる。
- (3) 例えば、「盘点和风水有关的政府建筑：多数祈求升迁」（政府建築に関する点検と風水：多くの人が昇進を切に願う）〔『騰訊新聞』2015年06月24日付、<http://news.qq.com/a/20150624/054386.htm#p=1>〕、「豈能不信马列信风水」（マルクス・レーニンが風水を信じたことをどうして信じることができないのか）〔『湖北日報』2015年12月20日付、<http://focus.cnhubei.com/media/201512/t3499233.shtml>〕などであるが、この類いの記事は多い。
- (4) 中国共産党新聞網2017年2月3日「严格落实“十二个不准”严明党的政治纪律」の中で以下のように呼びかけられている。「党员不准搞封建迷信，不准信仰宗教，不准参与邪教，不准纵容和支持宗教极端势力、民族分裂势力、暴力恐怖势力及其活动。」（党员は、古臭い迷信を許さない、信仰宗教を許さない、邪教への参加は許さない、極端な宗教勢力、民族分裂勢力、暴力恐怖勢力及びそれらの活動を黙認しない支持しない。）<http://dangjian.people.com.cn/n1/2017/0203/c117092-29056229.html>]

- (5) 万建中 2016年「民俗与基本社会秩序维系」（民俗と基本社会秩序との連携維持）『社会治理』2016年第6号 北京師範大学出版社、姚慧 2013年「民俗是“迷信”？——从革命思维中的“迷信”与民俗谈起」（民俗は迷信か？——革命思考の中の「迷信」と民俗談から）『民俗艺术』2013年第2号 广西民族文化艺术研究院、などが参考になる。
- (6) 八卦鏡は一種の吉祥物。八卦鏡には、平面鏡のもの、凸鏡のもの、山海鎮が描かれたものなどがある。用途はそれぞれ違うが、光を反射し、陰陽の平衡をとり、家庭の平和や家人を守ってくれるといわれる。黄一真 2013年『解读 吉祥文化』黑龙江科学技术出版社、p 20~21を参照。
- (7) 中国結 (Zhongguo jie、ちゅうごくむすび) は、チャイニーズ・ノットとも呼ばれる。1本の紐を複雑に編み上げたもので、いろいろな形がある。吉祥物であり、正月になると新しく買い換えて、ドアや入り口に飾る家が多い。縄は長生きの寓意を持ち、1本の縄を結んで作ることから、災難を避け、病気を避け、長生きを願うものとされる。また「蝴蝶結」は、「蝴」と「福」の音が似ていることから、福を送るものとされる。
- (8) 恭王府は北京市西城区前海西街にある。現存する王府の中では、最も保存状態の良い清時代の王府とされる。周辺地区は整備が進み、やや小綺麗な地区となっている。
- (9) 郑晓江 1994年『中国辟邪文化大观』（下）花城出版社、p 659、674。
- (10) 「祈福納祥」は幸福を祈り、吉祥を受け入れるの意、「辟邪鎮宅」は災禍を避け家を鎮めるの意、「招财進宝」は福の神が舞い込むように富をもたらすの意である。
- (11) 毛猴 (maohou まおほう) は、北京の伝統工芸品で、漢方薬の材料で作られた2センチほどの小さなサルのこと。セミの抜け殻、モクレン、白笈、アケビなどで作る。
- (12) 任骋 1991年『中国民间禁忌』作家出版社、p 561。
- (13) 王禎 (1271年-1368年)、字は伯善、元代の東平（現在の山東東平）の人。中国古代農学、農業機械学者。『王禎農書』は中国古代農学を記述したもので、中国では重要な位置を占める。
- (14) 大乔 2008年「葫芦」『图说中国吉祥物』中国社会科学出版社、P 147。
- (15) 注 (12) に同じ。p 557。
- (16) 注 (12) に同じ。p 556。
- (17) 注 (14) に同じ。p 184「石敢当」。
- (18) 小玉正任 2004年『民俗信仰 日本の石敢当』慶友社、高橋誠一 2008年「琉球における石敢当——那覇市首里地区を事例として——」『アジア時代の地理学 伝統と変革』古今書院、などを参照。
- (19) 小玉正任 前注書、p 8、174、175、178。
- (20) 周星 1993年「中国と日本の石敢当」『比較民俗研

究』7号 比較民俗研究会、p7。

- (21) 坂井美香 2004年「つるもの栽培禁忌とその社会性——新潟県柏崎市米山町の事例——」『環境・地域・心性：民俗学の可能性』岩田書院。
- (22) 坂井美香 前注書、および、堀内真 1996年「夕顔禁忌のムラ——山梨県御坂町大野寺の伝承」『西郊民俗』(156) 西郊民俗談話会、堀内真 1997年「作物禁忌伝説と俗信——夕顔の伝承を中心として」『信濃』49巻9号 信濃史学会、等を参照。
- (23) 年画は民間芸術の1つである。旧年中に準備し、新年を迎えるときに取り替え、その後1年間飾って鑑賞する。ゆえに「年画」という。門の戸の上や室内に飾り、邪気を払い、吉祥の到来を願い、新年を祝うもので、門神の画とともに「喜画」と呼ばれる。